

令和 3 年 6 月 17 日現在

機関番号：15401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23247

研究課題名(和文)原爆・被爆体験の継承における「普遍的平和」の概念：言説変遷と国際的影響の実証研究

研究課題名(英文)The Concept of Universal Peace and Atomic-bomb Experience: An Empirical Study of Discourse Transformation and Globalisation

研究代表者

vanderDoes Luli (van der Does, Luli)

広島大学・平和センター・准教授

研究者番号：00839087

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：壮絶悲惨な原爆・被爆体験は、いかにして普遍的平和の希求へと昇華されたのか、総数3万件の証言や口コミなど一次資料からデータ構築・解析を行い、実証記憶学の理論と多領域横断型手法を用いて原爆・被爆体験に関する言説の形成・伝播・変遷過程を精査し、背景と事由、条件、プロセスを明らかにした。被爆者を取り巻く社会情勢・報道・当事者の自己表現が、相互に作用しながら集合記憶が形成される過程で、被爆の実相、被爆後の生き様、核兵器廃絶に関する「記憶が更新」され、普遍的平和概念が発生したこと、の情報欠如は継承を妨げることを実証した。成果は、SCCI論文など査読付き論文6本、学術書の担当章と英訳書を含む。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、3万件を超える一次資料データを構築し、定性・定量分析を用いて、原爆・被爆体験に関する言説の形成・伝播・共有・変遷過程を精査することにより、被爆者の言説が、原爆投下に対する怒りと憎しみから普遍的平和の希求へと昇華した変遷プロセスを実証的に解明した。さらに、継承する側とされる側が発信するメッセージの内容を可視化して整合性を経時的に検証し、意思疎通の条件を同定し、それを基に将来の効果的な継承の方策を示唆した。これは、まさに切迫した課題である次世代への被爆体験の記憶継承に資するものである。学術的着眼点、方法論ともに斬新且つ画期的である本研究は、普遍性に富む平和的な戦争記憶継承に活路を見出す。

研究成果の概要(英文)：How have the atomic-bomb survivors risen over the memories of their atrocious experiences, aspiring for universal peace? To answer this question, I created a database of 30,000 hibakusha testimonies and SNS postings, then applied interdisciplinary triangulation methodology to analyze the data, combining quantitative text analysis and qualitative historical-critical discourse analysis. The results shed light on the socio-historical background, conditions, and the process of construction, communication, dissemination, and transformation of the discourse of atomic-bomb experiences. The change in hibakusha's social circumstances, their self-representations, and the media reports about them fed into a collective memory of the authentic atomic bomb experience. Individual memories continue to update in three areas: the reality of atomic-bomb damage, lifelong struggle after the bomb, and abolition of nuclear weapons, shifting hibakusha's perceptions from visceral anger towards universal peace.

研究分野：社会科学、応用言語学、実証記憶学、平和学、計量テキスト解析、言説表象分析

キーワード：普遍的平和 記憶 原爆 言説変遷 継承 核被害 実証研究 計量テキスト分析

## 1. 研究開始当初の背景

### (1) 被爆体験継承における体系的研究の不足

原爆・被爆体験の研究は、これまで医学、物理学、政治学、歴史学、社会学、文学などの観点から展開されてきた。その知識の蓄積は深大であり、医療や社会保障、思想や政治、国際関係など幅広い分野に影響を与えてきた。しかし、原爆・被爆体験の継承分野においては、市民活動の事例研究が中心であり、未だ全体像が掴みにくい。被爆体験の記憶の継承をいかに効果的に行うべきか考察する上でも、国内外の戦争記憶継承の事例を適宜、取捨選択しながらヒロシマ・ナガサキの事例に照らして将来を模索する現状である。特に、非人道的な核兵器の使用による壮絶悲惨な被爆体験が生んだ怒りや憎しみから、「普遍的平和の希求」へと被爆者の思いが昇華されたプロセスと条件について、体系的に説明する研究が十分に醸成されていない事に注目した。

### (2) 被爆者との限られた時間、誤情報・情報不足による平和的な被爆体験継承の困難

被爆から75年、被爆者の平均年齢は83歳を超え、原爆・被爆体験継承の取り組みは岐路に直面している。実体験をもとに平和の尊さを語る被爆者の限られた時間を鑑み、本研究を、緊急の課題として立ち上げた。2020年は、核武装解除・核災害防止に向けた活動における大きな節目でもある。1982年国連軍縮総会での荒木武広島市長の発言を機に発足した「平和首長会議」は、2020年までに核兵器のない世界の達成を目指して、地方自治体の都市間連帯を推進してきた。同会議の上部国際提携組織である核兵器廃絶国際キャンペーン (ICAN)は、国連核兵器禁止条約成立に尽力したことで2017年にノーベル平和賞を受賞し、2020年には条約締結にこぎつけた。しかし、核保有国の批准への道はまだ遠い。現状打開に向けて、世論の活性化の重要性、中でも「当事者意識」をいかに育むかについて議論されている。そんな中、国連でも、誤った情報が民族間・国家間の相互不信を生み、紛争勃発の引き金となる可能性について、持続可能目標 (SDG Goals) の枠組みで頻りに議論されている。中でも「語り (narrative)」と「言説 (discourse)」が、人々の思想・見解・行動に影響し、「歴史的記憶」を左右するとして、偽りの言説伝播 (プロパガンダ) が、国際的に緊急の研究課題とされている。以上から、社会に対する「言説共有」の影響と、世論の動向に対する「当事者性」の関与が、重要な研究対象として浮かび上がる。そこで本研究は、原爆・被爆体験の継承と世論変遷の關係に着目し、普遍的平和を希求する言説が、生成され、変遷し、越境してきたプロセスを実証的に考察した。

## 2. 研究の目的

### (1) 被爆の苦しみや憤りが、普遍的平和を希求する思い、に昇華していくプロセスを探る

原爆・被爆の実相の知識は、一般に、特に海外で十分に共有されていない。依然として、原爆投下が第二次世界大戦の早期終結に貢献したとする言説が根強い。核兵器の脅威は、被爆の物理的影響の側面から語られ、長期的に持続する社会・精神的影響についての言及は少ない。そのため、被爆体験は歴史上のイベントとして、一過性の惨事と考える人も少なくない。しかし、被爆地では、被爆者の人生そのものが、核兵器廃絶の人道的理由と直結している。本研究の一部でもある被爆者意識調査によると、被爆者の約半数が核兵器廃絶の可能性について悲観的だが、それでもなお、一種の責任感や当事者性を持って核廃絶を訴え、非核化による世界平和を希求している。以上のような理解の齟齬は、被爆当事者の怒り、憎しみの言説が、核廃絶運動と普遍的平和の希求の言説に昇華してきた経緯が、広く十分に伝わっていないためと仮定し、言説変遷と伝播共有のプロセス解明を本研究の中核目的と位置付けた。

原爆・被爆体験には多角的な面があり、「いのち・くらし・こころ」を立体的に捉えなければ全体像が掴めない。生身の人の命の重さ・被害の実態を語らずして核兵器について議論することは、言葉による核の脅威の「浄化 (sanitization)」(Hoskins and O'Loughlin, B. 2011)<sup>1</sup>であり、非核運動の抽象化が懸念される。そのような傾向が、原爆・被爆体験継承において、日本国内外での差異に発展する経緯を調査・分析した。定性・定量分析を用いて、継承する側とされる側の言説の整合性を検証し、意思疎通の条件を同定し、言葉を介したコミュニケーションの内容を可視化し、研究結果から、効果的な継承の方策を探求・提唱することを目的とした。

### (2) 汎用的な原爆・被爆体験と継承に関するデータベースを構築。

多様な原爆体験を表現する言説のパターンを歴史社会的背景の文脈に据えて分析し、バランスの取れた考察を可能にするためには、定量・定性双方の分析が可能な一次資料データ群が必要不可欠である。そこで、1985年から2021年までの、主な被爆者アンケート調査 (1985年被団協原爆被害者調査、2005年・2015年朝日新聞被爆者アンケート調査データと、2009-2021年読売新聞被爆者調査) などをもとに、選択肢回答の集計のみならず、自由回答を電子化し、言説分析に特化した網羅的なデータベースを新規構築した。また、将来の記憶継承の担い手の視点から、被爆展示を見た一般市民の任意のコメントや学生アンケート結果などを収集し、データ化した。これらにより、継承する記憶を提供する側と受け取る側の双方の視点から考察可能にし、多領域横断型研究 (人文・自然科学など) への利用も可能にした。

### 3. 研究の方法

#### (1) 多領域横断型、実証記憶学の枠組み

記憶を提供する側、つまり被爆当事者の証言において、関連する、または時に矛盾する概念を、本人がどう用いて原爆・被爆体験を語り、自己を表現しているのか、一連の統計的・及び質的な言説分析を用いて、心象風景を探索し、言説変遷の経緯と条件の説明を試みた。仮説を立て、記憶を多角的に検証するため、多領域横断型の手法と実証記憶学 (Memory Studies) の理論的枠組みを用いた。また、言説変遷と伝播の理論モデルを用いて (van der Does and Hook 2017) <sup>2</sup>、被爆の実相の記録と記憶が相互に更新・反映しつつ、常に更新する被爆の実相の言説として、被爆証言などを介して関係者間で伝播され、共有されるプロセスを分析し、考察した。

#### (2) 汎用性の高い被爆体験の自由記述を含むデータの構築

定量・定性双方の分析が可能な一次資料としてのデータ群を構築した。1985年被団協原爆被害者調査、2005、2015年朝日新聞被爆者アンケート調査データ、2009—2021年読売新聞被爆者調査などをもとに、従来から客観的で再現性のある分析が困難、とされてきた自由回答を電子化し、言説分析に特化した網羅的なデータベースを新規に構築して、多領域横断型研究への利用を可能にした。さらに、ウェブ上で公開されている証言集について、個人情報や倫理著作権上の問題がなく、出典を確認したものに限定してデータベースに組み込んだ。

また、将来の記憶継承の担い手の視点から、広島を訪れて被爆の実相にふれた人々の任意のコメントや学生アンケート結果などを収集・データ化し、継承する記憶を提供する側と受け取る側の双方の視点から考察・比較分析可能にした。自由回答を電子化し、言説分析に特化した網羅的なデータベースを新規構築した。これも、多領域横断型研究への応用的な再利用を可能にした。

さらに、グラフ理論及びニューラルネットワークを用いた可視化法と従来の統計手法を併用し、特に、大量の文書から特定の概念を抽出するに当り、教師無し及び半教師有り機械学習アルゴリズムに使う潜在的ディリクレ配分法 (Latent Dirichlet Allocation: LDA) を用いたトピックモデルで潜在的意味解析を行い、多重対応分析で語間及びカテゴリーと語の間の関係性を可視化した。本研究で利用した解析手法を次の表に示す。

作業段階	作業内容	使用ソフトウェア
データ整形	分析フォーマット及びエンコーディングに整形・変換	Excel (Open Office)
データ階層化	各種カテゴリカル変数の導入とデータの階層化、分割	Excel, KH Coder, R
題材抽出	潜在的意味解析、R上でLDAを用いたトピックモデル	R, MeCab, Python
カテゴリ別特徴	多重対応分析による可視化、自己組織化マップ	KH Coder, R, MeCab
関連語分析	特定表現関連語の共起ネットワーク分析で可視化	KH Coder, R, MeCab
概念抽出	コーディングルールによる概念抽出、内容分析	KH Coder, R, MeCab
意味論的	語間の関連性の強弱を共起ネットワークで可視化	KH Coder, R, MeCab
モデル探索	連続変数作成、因子分析、GLM、構造方程式モデル	SPSS (PSPP), R

### 4. 研究成果

#### (1) 汎用性「被爆体験と継承」データ構築

本研究では、上述のように、被爆者証言とアンケート回答、約7千件の被爆証言や展示物に対する一般市民の反応、学生の原爆・被爆体験と非核に関する理解と意見、被爆と非核に関する国内外の報道記事、など一次・二次資料から情報を解析可能な形式に加工し、データ群を構築した。

#### (2) 被爆の実相～記録と記憶の更新

上記のデータをもとに、各調査の設問と回答を年代別・テーマ別に整理・解析し、各年の同一の設問に対する回答で全体傾向を抽出し、継時的パターンを考察した。この結果を時代背景に照合し、各調査が行われた時点で、新たに発見・確認された被爆の実相に関する記録の有無と照合した。この作業を綿密に繰り返すことにより、記録の更新・情報共有・被爆者証言への更新した記録の反映というプロセスを経て、証言がより詳しくなり、証言のナラティブに一貫性や一般性が加わっていく行程を明らかにした。これを、被爆の実相に関する継時的な「記録と記憶の相互の関与による更新」と名付けた。

#### (3) 立体的な被爆の実相表現と被爆体験継承の要件

本研究の核心をなす学術的な問いである「被爆者が、米国の原爆投下に対する、怒り・憎しみを普遍的平和の希求という言説に昇華させたプロセスの解明」に伴い、「被爆体験の継承における言説変遷の影響」を明らかにした。特に、言説が共有される際に、「非核」と「被爆者」という概念が、結合または乖離することで、どんな社会的影響を与えるのか、同体験の継承または忘却にどう影響するのか、プロセスと結果を実証的に探求した。被爆当時の物理的な実相のみを提示して核兵器の非人道性について議論することは、兵器自体の脅威を強く印象付けるが、その脅威は、爆発時と直後の破壊力に限定された一過性のものというイメージを払拭できず、社会と人生への長期的悪影響を、十分に継承する言説が生成されないことを実証した。原爆・被爆体験には多角的な面があり、「いのち・くらし・こころ」を立体的に捉えなければ全体像が掴めない。

人命の重さと被害の実態に加えて、被爆後の生き様を伝えることによって初めて、核兵器が個々の人生と社会に持続的長期的な被害を与えるものである事が、大局的に理解されることが示された。さらに、被爆後の人生の実相を十分に継承しなければ、言葉による核の脅威の「浄化」と矮小化が起こり、非核運動の抽象化が懸念されることを示した。また、そのような傾向が、原爆・被爆体験に関する国内外のメディア表現上の相違と、一般の理解の齟齬・格差に発展した経緯を明らかにした。同時に、齟齬を埋めるべく行われた国際交流の被爆証言を通じて、被爆者自身の自己アイデンティティが確立され、証言を推敲しながら「普遍的平和の希求言説」に昇華してきたプロセスを解明した。

さらに、定性・定量分析を用いて、被爆体験を継承する側とされる側の言説の整合性を検証し、コミュニケーションの内容を可視化し、条件を抽出・分析して、より効果的な継承の方策を採求・提唱した。これについて、被爆体験を軸にした普遍的平和の概念が「①被爆の物理的実相」、「②人生経験としての被爆の実相」、「③核兵器廃絶の訴え」の三言説から構築されることを示した。これら三言説が一体となって伝達されれば、継承される側に当事者感を醸成し、普遍的平和に向けた行動を促進するが、②が不十分であると影響力が限定されることを解明した。

#### (4) 本研究の本成果と派生成果のまとめ

成果と達成事項の主なものを、以下の16項目に要約する。

1. 被爆体験を表現する証言、アンケート回答、手記、文学、画像、スケッチなど一次・二次資料の収集。
2. 国内外の被爆体験継承に関する新規データベース構築（電子化、タグ付け）。新規5種類のデータベースを構築（被爆75年学生調査・被爆75年被爆者調査・平和記念資料館訪問者による国際観光ウェブサイトの口コミ2013年～2021年3月（英・日））。
3. 新規・既存データベース（アンケート・証言等）を比較分析可能に対応させるためのデータ整理・加工を行なった。
4. 上記2と3を用いてデータ解析と言説分析を行い、理論を構築し、定量・定性分析、結果の相互検証と解釈、言説の変遷理論モデルの構築と汎用性テストを行なった。
5. 言説の変遷と動員の社会理論モデル構築、同モデルを用いて、被爆体験における「記憶」としての言説変遷の軌跡と要因・結果を解明・体系化。
6. 1947年開始から2018年までの「広島平和宣言」を、日本語原文と英語翻訳文で網羅的に分析した結果、「被爆体験の継承」の過程において、被爆地を示す「ヒロシマ」というアイデンティティ構築が復興運動を促進し、「普遍的平和の希求」という言説形成に関与していることを見出した。被爆体験継承における被爆者とヒロシマの自己アイデンティティ変遷の軌跡とその文脈とを同定・理論化した。日本語の原文では、平和都市広島での平和希求の概念に寄与した被爆者の位置付けが、被爆時と被爆後の体験ともに明示されているのに対し、英訳文では長年に渡って、平和都市広島の国際性と核兵器廃絶の概念が強調され、市民の「被爆後の生き様」や被爆者の戦後の社会保障問題は周辺事情として言及が抑制されるにとどまっている。証言する被爆者が海外で平和都市HIROSHIMAを知らしめてきた過程についても、英文の平和宣言では曖昧であることが判明した。これらは、今後の「平和都市広島」の国際的メッセージの発信のあり方に、重要な示唆を与える<sup>3</sup>（ファンデルドゥース・川野 2019）。2019年、オランダ・アムステルダム大学戦史資料研究所における国際学会で論文「HIROSHIMA's Identity, A Tapestry of Victims, Perpetrators, and a Symbol of World Peace」を発表。
7. 上記の観光者口コミデータベース（英語・日本語）で広島への観光者の発信内容を分析した。現地で被爆の現物と現実にふれ、交流の機会を得た観光者らが、「考えさせられる」という表現を用いて意識の変化があったというメッセージを発信する傾向を明らかにした。さらに、この傾向は、「記憶の場」に赴き、資料館の「簡潔で中立的な展示表現」により「被爆者の実体験と現物を中心に据えた展示を体験すること」の三条件が揃った時に、確認されることを明らかにした。（van der Does・Kawano 2019b）<sup>4</sup>。
8. 以上の成果に基づき、広島平和記念資料館の展示に対する国内外の反応と被爆体験継承の関係、平和観光を通じた市民の自発的継承の実態と将来の可能性をまとめ、市民参加型の次世代への継承の方策を考察し、提唱した。広島市観光政策部ピースツーリズム懇談会や、広島平和文化センター広島平和記念資料館運営推進会議で報告した。
9. 2018年、2019年、2021年の市民公開講座を資料館と企画運営共催し、成果を社会に還元し、対話を促進した。
10. 本研究で得られた被爆者の普遍的平和の概念と平和宣言のデータベースを参考にしつつ、所属センター主催被爆75年の記念事業として行われた広島大学学生の「日英学生平和宣言」事業で講義を行い、学生平和宣言（英語）執筆を指導した。
11. 被爆者インタビューの分析結果により、通常の公開証言以外の場では、「あの日」の実相の証言以外に、「その後の人生」の実相への言及が多いことを明らかにした。

12. 被爆者の乗り物に関する表現について、インタビューと86年調査と2005年朝日アンケート調査をもとに分析した結果、乗り物が被爆の記憶とトラウマを惹起する反面、時を経て記憶も更新され、被爆電車に自らを重ね、平和の象徴とする傾向も見出された。(ファンデルドゥース・川野 2020a)<sup>5</sup>
13. 記憶とトラウマについて、絵と証言で体験を継承する被爆者、森富茂雄氏の言説と視覚表現を分析し、証言つき画集を英訳出版した。さらに、被爆者の精神的痛みに注目し、記憶が特定の場所の想起によって惹起されることをみとめ、記憶の場所とトラウマについて考察した。白地図に絵が書かれた場所を付し、避難と家族捜索のルート、及び当時の広島のレストランを示すマップを英語で作成した (van der Does 2020c) <sup>6</sup>。本英訳出版物で、公益財団法人ヒロシマ平和創造基金ヒロシマ・ピースグラント2020、および広島ユネスコ協会広島ユネスコ活動奨励賞を受賞した。
14. 森富氏ら中島地区出身の被爆者にインタビューし、消えた町と記憶の言説を考察した。そこから「表現すること」が、個人記憶である被爆の痛み・トラウマを、普遍性ある平和への願いに変容させることを見出し、本研究の成果である「被爆者の普遍的平和」の理論的枠組みと位置付けた。これを被爆者意識調査にも採用した。
15. 平和センター・読売新聞共同「被爆75周年原爆被爆者意識調査」の分析と解釈、執筆を担当した。記憶継承と核兵器廃絶に関する被爆者の期待と想いを明らかにした。その上で、原爆投下につまざる憎しみや憤りから、無力感、諦めを経て、被爆者が公共の場で証言を始め、他者と交流し、他者のまなざしにふれる過程で、地域的な平安からより普遍的な平和の希求へと、被爆者の意識が変容したプロセスを見出した。さらに次世代にも同じように被爆体験を語り伝えながら交流を通じて、平和を構築して欲しいと願う傾向を体系的に実証した (ファンデルドゥース・川野 2021b) <sup>7</sup>。
16. また、平和センター・読売新聞共同「被爆75周年学生平和意識調査」の分析と解釈、執筆を担当した。広島・長崎の大学一年生は、被爆の基本情報について意識と知識が高いが、特に実際、資料館などを訪れて現場・現物・現実を体感した学生は、具体的な被爆体験継承への理解や要望を表現し、被爆体験・核兵器廃絶・普遍的平和の相互関係を認識していることを明らかにした。(ファンデルドゥース・川野 2021a) <sup>8</sup>。

上記の1～7および14～16は、何れも計画に沿って遂行された。これらの成果をさらに掘り下げ、構築した方法論の汎用性を最大限に活用することで、8～13のように、ミュージアムという教育・平和活動の場や、観光という現地体感による継承の場においても応用が可能な、派生的な成果も得られた<sup>9</sup>。以上を踏まえて今後は、「記憶の更新」の機序と社会的影響について理論化を進めつつ、デジタル環境と現場環境における実践的な記憶継承への応用を探求したい。

#### <引用文献>

1. Hoskins, Andrew & O'Loughlin, B. (2011) *War and Media*, Polity, UK.
2. van der Does, Luli and Hook, Glenn D. Hook (2017) "Mediating Risk Communication and the Shifting Locus of Responsibility: Japanese Adaptation Policy in Response to Cross-border Atmospheric Pollution" in Hook, Glenn D., et al. (2017) *Environmental Pollution and the Media: Political Discourses of Risk and Responsibility in Australia, China and Japan*. 98-145, 2017, Routledge, UK
3. ファンデルドゥーススリ、川野徳幸 (2019a)「ひろしま」アイデンティティの変遷～平和宣言日英比較1947-2018実証研究から、広島平和科学、40巻、pp. 69-94.
4. ファンデルドゥーススリ、川野徳幸 (2019b) 'Online tourist reviews and accidental conveyors of memories of the atomic bomb', *Journal of Tourism and Cultural Change*, 18巻, 5号, pp. 514-531.
5. ファンデルドゥーススリ、川野徳幸 (2020a)「乗り物」を介した被爆体験の早期とトラウマの実証的考察、広島平和科学、41巻、pp. 13-31.
6. van der Does, Luli (2020c) *Disappeared Towns, Tracing Memories: Drawings and Testimonies by Shigeo Moritomi*, ヒロシマ・フィールドワーク実行委員会、単行本(一般書)、単訳 English、ISBN-13: 9784600005108, 119ページ。
7. ファンデルドゥーススリ、川野徳幸 (2021b)なぜ、被爆者は証言するのかー被爆75年アンケート調査結果を用いた数理モデル構築の試みー、広島平和科学、42巻、pp. 123-143.
8. ファンデルドゥーススリ、川野徳幸 (2021a)被爆体験継承の可能性を探るー「被爆75年学生平和意識調査」の多領域横断型研究ー、広島平和科学、42巻、pp. 145-173.
9. ファンデルドゥーススリ (2021c)「仮想・拡張現実空間のピースツーリズムと当事者性」、山田義裕・岡本亮輔(編著)いま私たちをつなぐものー拡張現実時代の観光とメディア、25ページ。弘文堂、2021年、単行本(学術書)、ISBN-10:4335552041, ISBN-13: 978-4335552045.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 ファンデルドゥースルリ、川野徳幸	4. 巻 42
2. 論文標題 被爆体験継承の可能性を探る『被爆75年学生平和意識調査』の多領域横断型研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島平和科学	6. 最初と最後の頁 145-173
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/50791	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ファンデルドゥースルリ、川野徳幸	4. 巻 42
2. 論文標題 なぜ、被爆者は証言するのかー被爆75年アンケート調査結果を用いた数理モデル構築の試み	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 広島平和科学	6. 最初と最後の頁 123-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/50790	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Luli van der Does、Kawano Noriyuki	4. 巻 18
2. 論文標題 Online tourist reviews and accidental conveyors of memories of the atomic bomb	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Tourism and Cultural Change	6. 最初と最後の頁 514～531
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/14766825.2019.1702048	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 ファンデルドゥースルリ、川野徳幸	4. 巻 41
2. 論文標題 「乗り物」を介した被爆体験の想起とトラウマの実証的考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 広島平和科学	6. 最初と最後の頁 13-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15027/49032	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 ファンデルドゥースルリ、川野徳幸	4. 巻 40
2. 論文標題 「ひろしま」アイデンティティの変遷 平和宣言日英比較1947-2018実証研究から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 広島平和科学	6. 最初と最後の頁 69-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/47364	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 湯浅梨奈, ファンデルドゥース ルリ, 川野徳幸	4. 巻 40
2. 論文標題 広島土砂災害被災者は何を語ったのか	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 広島平和科学	6. 最初と最後の頁 95-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15027/47365	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件(うち招待講演 7件/うち国際学会 6件)

1. 発表者名 ファンデルドゥース ルリ
2. 発表標題 子どもだった被爆者ー生きてきた記憶
3. 学会等名 市民公開講座「次世代への被爆体験継承ー誰の視点で語るのかー
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 van der Does, Luli
2. 発表標題 Discussion on Hiroshima and 75th years of Memories
3. 学会等名 「Commemoration of the Past and Actions for the Future」2020.8.6, Federal Civilian Education Bureau, Federal Foreign Office of Germany (招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 ファンデルドゥース ルリ
2. 発表標題 『消えた町、記憶をたどり』市民参画型、記憶の継承プロジェクトから
3. 学会等名 『コンテンツツーリズムにおける『戦争』の消費と歴史理解に関する国際比較研究』公開研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 van der Does, Luli
2. 発表標題 ツーリストが体験したい広島
3. 学会等名 ヒロシマ・ピースフォーラム、広島市立大学「広島からの平和学」連携講座第5回（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 van der Does, Luli
2. 発表標題 Migration and Songs
3. 学会等名 6th International Workshop on Music, Memory and Boundaries in East Asia ~ Mobility and Popular Songs in Building a New Nation（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 van der Does, Luli
2. 発表標題 ヒロシマの記憶遺産、被爆後の応急復旧から持続的復興への道のり / Hiroshima's Legacy: Transition from emergency rehabilitation to sustainable revitalisation
3. 学会等名 58th OSEAL Forum in Hiroshima: Praying for Peace 9 November, 2019, International Conference Center Hiroshima（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年



1. 発表者名 ファンデルドゥース ルリ
2. 発表標題 ピース・ツーリズムと当事者性・居場所感
3. 学会等名 2019年度国際シンポジウム HIROSHIMAとピースツーリズム(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Luli van der Does
2. 発表標題 Tourists' Spontaneous Engagement to Conveying the Memories of Hiroshima: An Empirical Analysis
3. 学会等名 The Center for Peace Hiroshima University, RFMC Hokkaido University & Seoul National University Joint International Research Conference: Weaving Peace through Heritage Tourism(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Luli van der Does
2. 発表標題 HIROSHIMA's Identity, A Tapestry of Victims, Perpetrators, and a Symbol of World Peace
3. 学会等名 Seminar Crossing Borders, Pushing Boundaries: Rethinking Transnational Memories of War in Asia and the Pacific, 2019年03月27日、NIOD Institute for War-, Holocaust- and Genocide Studies(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ファンデルドゥース ルリ
2. 発表標題 平和都市アイデンティティの力
3. 学会等名 平成30年度市民公開講座 被爆体験を「生きる力へ」テーマ5選
4. 発表年 2019年

## 〔図書〕 計2件

1. 著者名 山田 義裕、岡本 亮輔 編著 (ファンデルドゥース瑠璃 13賞を担当)	4. 発行年 2021年
2. 出版社 弘文堂	5. 総ページ数 284 (担当 25ページ)
3. 書名 いま私たちをつなぐもの (13章「仮想・拡張現実空間のピースツーリズム と当事者性」を担当)	

1. 著者名 Luli van der Does (translation and maps), Shigeo Moritomi (Japanese Original)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Hiroshima Fieldwork Committee	5. 総ページ数 119
3. 書名 Disappeared Towns, Tracing Memories: Testimonies and Drawings by Shigeo Moritomi	

## 〔産業財産権〕

## 〔その他〕

-

## 6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	川野 徳幸  (Kawano Noriyuki)  (30304463)	広島大学・平和センター・センター長・教授   (15401)	広島大学平和センター・読売新聞共同作業被爆75周年原爆被爆者調査および被爆75周年学生平和意識調査代表 医学的見知から核被害に関する助言 市民公開講座運営協力。(2019年、2021年)
研究協力者	山田 義裕  (Yamada Yoshihiro)  (40200761)	北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授   (10101)	メディア、拡張・仮想現実空間における観光の視点から助言。 被爆地ヒロシマと平和観光における共同研究。 「いま私たちをつなぐもの」編者・プロジェクト代表。
研究協力者	西川 克之  (Nishikawa Katsuyuki)  (00189268)	北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授   (10101)	広島大学平和センター・北海道大学メディア・コミュニケーション研究院・ソウル大学社会学部共催国際シンポジウム/ 国際学会「Weaving Peace」共同代表。

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	山村 高淑 (Yamamura Takayoshi)  (60351376)	北海道大学・観光学高等研究センター・教授  (10101)	コンテンツ・ツーリズムの見知から、被爆というコンテンツについて助言。 成果発表の共同執筆中。
研究協力者	片柳 真理 (Mari Katayanagi)  (80737677)	広島大学・人間社会科学研究所・教授  (15401)	被爆者のトラウマと人権の見知から、助言。 International Seminar, Topology of Air 開催協力。 市民公開講座運営協力。(2019年、2021年)。 成果発表の共同執筆中。
研究協力者	キム ソンミン (Kim Sungmin)  (60600426)	北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・教授  (10101)	戦争記憶と大衆文化の分野において、助言。 成果発表の共同執筆中。
研究協力者	シートン フィリップ (Seaton Philip)  (70400025)	東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授  (12603)	戦争の歴史と大衆文化における戦争コンテンツの分野において、助言。 成果発表の共同執筆中。
研究協力者	志賀 賢治 (Shiga Kenji)	広島平和文化センター・広島平和記念資料館・館長	市民公開講座共催代表。(2019年) 戦争記憶の展示方針と計画において調査協力。 広島平和記念資料館展示物調査協力。
研究協力者	滝川 卓男 (Takuuo Takigawa)	広島平和文化センター・広島平和記念資料館・館長	市民公開講座共催代表(2021年) 被爆者聞き取り調査協力。 広島平和記念資料館展示物調査協力。
研究協力者	大池 真知子 (Oike Machiko)  (90313395)	広島大学・ダイバーシティ研究センター・教授  (15401)	被爆者と学生の芸術を介した記憶表現と継承活動における共同研究(本スタートアップ研究の派生的研究として2021年3月発足)。
研究協力者	フック グレン (Hook Glenn D.)	英国国立シェフィールド大学・The School of East Asian Studies・名誉教授	Political Scienceの見知から、被爆体験の言説変遷における国際的影響について助言。

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	ロビンソン マイク  (Robinson Mike)	英国国立バーミンガム大学・Ironbridge International Institute for Cultural Heritage・教授	国際文化遺産研究におけるヒロシマの記憶に関する助言。
研究協力者	ホスキンス アンドリュー  (Hoskins Andrew)	英国国立グラスゴー大学・教授	記憶の忘却と継承に関する理論構築における助言。
研究協力者	イブリン ブッハイム  (Buchheim Eveline)	オランダ王立戦時史料研究所・上級特別研究員	記憶の場としての広島に関する研究成果を共同執筆中。

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計5件

国際研究集会 Topology of Air Research Seminar	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 The Center for Peace Hiroshima University, RFMC Hokkaido University & Seoul National University Joint International Research Conference: Weaving Peace through Heritage Tourism	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 2019年度国際シンポジウム HIROSHIMAとピースツーリズム	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 平成30年度市民公開講座 被爆体験を「生きる力へ」テーマ5選	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 市民公開講座「次世代への被爆体験継承－誰の視点で語るのか－	開催年 2020年～2020年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
英国	Kent University	University of Glasgow	University of London	他2機関
オランダ	NIOD オランダ王立戦史研究所			
ドイツ	Federal Civilian Education Bureau	Federal Foreign Office of Germany		
スロベニア	University of Ljubljana			

共同研究相手国	相手方研究機関			
韓国	Seoul University			